

## 鎌倉期における春日社散在神人の動向

——南山城九ヶ郷神人と沙汰者——

村岡 幹生

### はじめに

本稿は、中世の大和国春日社神人について、従来知られていない寛元元（一二四三）年前後に生じた神人らをめぐる一訴訟事件を復元しつつ、春日社散在神人の動向について若干の論を及ぼすものである。

中世、畿内を中心とする各地において春日社神人の活動が見られたことは周知の事実であるが、彼らの在地社会における具体的存在形態や本所春日社への隷属形態などについては、十分に解明されきっていない面も多い。しかし、もと興福寺大乘院門跡坊官家の一つに伝えられる文書の一部が、『福智院家古文書』として紹介されるなど、上記課題に応える条件も徐々に整いつつあるように見うけられる。このような中、丹生谷哲一氏は、和泉国や南山城地域等における春日社神人について、彼らの活動拠点など基本的事実を明らかにしている<sup>(1)</sup>。とりわけ和泉国のそれに関する考

察は、史料上、和泉国の「九ヶ所神人」とある、その九ヶ所の地名に及ぶなど詳細をきわめたものである。

ところでその際、氏はこれらの地の神人について、自身の独自の分類に従ってこれを春日社散所神人の例として考察した。私は、散所神人であることを積極的に明示する史料がなく、史料上散在神人とある以上、これらの地の春日神人は、散在神人として考察するのが適切であると考えている。

この点を含めて私は先に中世春日社神人の組織について考察し、丹生谷説を批判しつつ私としての見解を示した。<sup>(3)</sup> 本稿は、前稿において紙幅の都合上割愛せざるを得なかった春日社散在神人の存在形態を示す一事件を詳述しつつ、前稿の散在神人に関する考察の部分の疎を補うものである。

### 一 既刊史料による事件の復元

この事件に関係すると思われる史料（以下に(A)～(G)としてあげる各文書）の大半は、既刊の『春日大社文書』・『福智院家古文書』のうちにあつて、既に知られているものである。ところが、(A)の他の『春日大社文書』所収の各文書(B)(D)(E)(G)は欠年文書であつて、そのうちのいくつかは、同書の頭註部分において誤って寛喜二(一二三〇)年の文書と関係付けられているし、さらに他のいくつかの文書は『大日本史料』や『鎌倉遺文』においてやはり同年の文書と推定されてきた。また『福智院家古文書』所収中のもの(C)(F)は、文字読解の不正確な部分を含んでいるように見うけられ、且つ当該史料の伝来に関する校註にも疑問が存する。<sup>(5)</sup>

以下に、各文書記事の正確な読解に基づく事実把握を経としつつ、そこから可能となる文書の年代比定を緯として、事件の復元に着手することとする。

関係文書のうち年代が確実なものは、端裏書によって寛元元(一二四三)年と判明する(A)七月一八日付九条良実長者宣案(奉者右中弁姉小路顯朝)<sup>(7)</sup>一点のみである。

この文書は次のように興福寺に命じている。

——「春日社前<sup>(きさきの)</sup>神人友清」について、春日社大宮権神主<sup>おみやごんのかんめし</sup>経定に仰せて召そうとした処、興福寺西金堂並びに別会所<sup>べつえしよ</sup>の寄人と号して参洛しないので、早く友清を召しまいらせよ。

次に、(B)七月二八日付(某)御教書<sup>(9)</sup>を検討すると、興福寺に対して神人清家・「清友」の事が命じられている。しかし、その具体的指示内容はそこには記されていない。だがここに、(C)七月二八日付右京権大夫某書状<sup>(10)</sup>があって、これはその日付・内容からして(B)の副状と判断されるものである。

この(C)は「神人清友事」と始まり、尋経僧都の奉書を(某)近辺に申し入れた旨を記したのち、「被召清家・清友許候也、何別会所寄人、社人等可交候哉、家清・清友等念々可令召進給<sup>由</sup>之、重可被申旨所候也」と記している。言い換えると、「別会所寄人は社人に交わるべからず、神人たる両者ばかりを召しまいらせよ」と命じているのである。

(B)(C)にはともに「清友」とあるが、これは友清の誤記と考えられ、また友清とは別に清家(C)においては「家清」と誤記も見られる)の名が加えられているが、その内容は大筋において、別会所寄人の件を問題にしている点で(A)に対応していると見做される。それ故、これら(B)(C)は(A)と同年の文書(従って(B)は九条良実御教書)と判断される。即ち、(A)の命令後に生じた興福寺別会所側の対応(尋経僧都奉書の提出等)をふまえて、(B)(C)が発されたと関係付けられよう。友清(「清友」)について、(B)(C)には「神人」とあって「前神人」とは記されていないのが気に懸るが、これは、「いま彼の身分については別会所寄人の件が問題なのではなく、もと神人たるが故に召すのだ」という論理が強調

されたが為にこのような表現となったものと考えたい。さらに加えて、彼の解職決定後あまり日数を経っていないという事情も、このような表現を生む可能性を高めると考える。

さて、(A)七月一日から(B)同二八日に至る間の事情を窺わせると思われる文書がある。(D)七月二一日付興福寺別会五師宛僧令円書状<sup>(11)</sup>である。

(D)によると、山城国相楽郡綺莊（かばたのしょう<sup>(12)</sup>）の「友清男」の事について、令円は「故帥大納言」後室である野田禪尼の意を受けて、「申入」したことがあったという。神人友清としてではなく、見下した表現である「友清男<sup>(13)</sup>」と記されているのは興味深い。「故帥大納言」は『春日大社文書』に正しく二条定輔と校されている。なお、野田禪尼が登場する理由は、同莊の現地支配にかかわる「領主」が禪尼の「孫子」にあたるという関係に因るという旨が、(D)には記されている。

さて、令円による「申入」後の事態について、(D)文書の表現に沿って見ておこう。

——その後禪尼が死去し、令円は、なお「申入」れて欲しいという「領主」の意を容れた。しかし、事態の進展は見られなかった。やがて仁和寺の太政僧都が度々「執申」されたことがあって、その際に令円に尋ねがあった。その時令円は、「直接に事にかかわってはいないが、「領主」は知らぬ者でもない」と返事をした。その後は、元の如くというほどではないにしても、令円と「領主」との関係は切れた訳でもなかった。そこへ長者宣が出され、それ以降は領家側からの言い立てもないことなので、私令円としては最近は殊更には口入していない。

以上、非常に曖昧な話であるが、令円はこのような経緯を記した後に、「今更一切口入しない」と別会五師に対して申し、自身のことがなお問題を生ずるのであれば、以上の旨を別会五師から披露して欲しいと述べて書状を終えてい

る。

右文書に登場する「領主」は、明らかに友清の側に立つ者と判断されるが、一方、仁和寺太政僧都が如何なる立場から関与したのかは、史料の文脈上判然としない。しかし、総じて綺莊をめぐる複雑な権利関係が錯綜していたことは確かである。そして、(D)の差出人僧令円とは、かつて同莊の「領主」の申しに従い友清を利用する立場で相論に口入したことのあった、興福寺別会所の関係者であることが判明する。ともあれ、令円はここにおいて、「友清男」の事に今後関与しない旨を別会所に約している。

以上の各文書を、推定に従い作成された順に配すると、次のようになる。

- (A)、寛元元年七月一日（前神人友清を召すべし）
- (D)、同年七月二一日（令円、友清の事に口入せざる旨を興福寺別会所五師に申す）
- (B)(C)、同年七月二八日（別会所寄人は交るべからず、清家、清友ばかりを召すべし）

さて、ここに(E)七月二八日付俊村申状<sup>(14)</sup>が存する。年は記されていないが、日付は(B)(C)と同日である。この文書は、「友清丸」の事について述べ、先ずはじめに、この申状に副えて同時に提出した「綺莊沙汰人申状」等に言及しつつ現地のようすを報告し、次のように記している。

——沙汰人の申状にも、友清らがまたしても神木を立てたと記されているが、昨日二七日に彼らが名田の内の早田等<sup>はやた</sup>に対して「自由茹取」を行ったのを、領家の御使<sup>おんつかい</sup>が確かに見ました。重ね／＼の狼藉です。去年の神木の一件は、経定が命じたのではないと方々より申していた。しかし、今回の狼藉に立ち会った春日社側の使者一人のうち一名は、経定に「常随」する「筆師僧」だったということです。

これによると、「領家」の御使は大宮権神主に常随する筆師僧の面を識っていたようである。俊村はさらに続けて次のように述べている。

——日数を限って召しても友清を召しまいらせもせず、その上に神人を放つ（解職する）ように命じられたとか承っておった折にこのような事態をひきおこしたのは、明らかに、「名主」<sup>なぬし</sup>（個々の神人が所属する社家三方の長官の何れかをさす言葉<sup>⑬</sup>）。この場合には大宮神主をさす）が友清に同心しているからです。今となつては友清を召そうとしても詮ないことで、「京御使等」は経定に参対して彼に理非を尋ねるべきでしょう。別会所の件は「事切」<sup>ことき</sup>れた（清算された）というし、西金堂の件も御沙汰を経られているのは神妙ですが、友清は今ではもっぱら「神人之威」を以って重々の狼藉を現わしているのだから、急ぎ経定に圧力をかけるべきです。但し、事実既に友清が神人を放たれているのであれば問題ありません。（書止）「以此趣早速可申沙汰給御候也、恐惶謹言」。

この文書（宛所は定かでないが、九条良実近辺か）によって、事件の全体像が少し明らかになって来た。友清らは、綺荘において前年来、興福寺別会所寄人・春日社神人の身分を利用して神木を立てて荘の田地を差し押えたり、早田の刈田狼藉を働くなどし、荘の領家（未詳）<sup>⑭</sup>方の俊村らと対立していたのである。この申状において俊村は、春日社の大宮権神主経定が友清を許容していると述べ、彼に非難を集中している。

俊村はここで、一方で友清と興福寺別会所との関係が既に絶たれているとの認識を示しており、(D)文書以降の事態をふまえているかのようなのである。ところが一方、友清の神人職が事実解かれているかについては確信を得ておらず、彼の解職を求めている。またここで彼の示している現状認識（傍線の部分）は、(D)に先立つ(A)において記されている事態（既に神人職を解かれている友清が、西金堂・別会所寄人と号して召しに応ぜず）とは正反対のようでもある。しかし、私はこのような点にもかかわらず、次のような理由からこの(E)文書は(A)～(D)以降に作成されたものと判断し

たい。

既に友清の神人職を解くことが、かかる手続の通例に従って名主<sup>なぬし</sup>によって確認されていたとしても、彼の所持する神木（立烏帽子・黄衣と並ぶ春日社神人の可視的身分標識）が未だ彼の手から取り上げられていなかったという事態が、可能性として十分に想定される。<sup>(17)</sup> かかる場合、友清は神人身分を解かれたのを承知の上で、現地においては依然として神人として振舞い続け、神木を武器に領家方の俊村と敵対しつつ、一方訴訟上においては、別会所寄人等を号して召しを逃れるという、彼自身の面<sup>おもて</sup>を替える戦法をとりうる。私は、事実このような状態が生じていたと想定し、この(E)文書の作成時(D)の後（即ち(E)も寛元元年の文書）と見做すのが、もっとも前後の関係上おさまりよいと考えるのである。なお、(E)の日付が(B)(C)と同日なのは、たま／＼そうなったままで、(E)と(B)(C)の間には一方が他方をうける等の直接の対応関係はないと見られる。

続いて、(F)七月一五日付右中弁顕朝書状<sup>(18)</sup>に注目したい。この文書には、「春日神人清家、今一両日内可召進之由、只今不廻時刻可下知候、以此旨可披露給候、謹言、／七月一五日辰<sup>(19)</sup>」右中弁顕朝<sup>(20)</sup>と記されている。

本文書では清家のみ召しが命じられているが、おそらくこれもこれまで検討した文書と一連の寛元元年中のもので、日付からして(A)の前に位置付けられるであろう。この文書では清家の召しが特にせかされている。彼は、友清の関係者としてその証言を得る為に召されていると考えられるが、或いは、この訴訟におけるかなり重要な局面（例えば、友清の解職が決定されそうな局面）が、この七月一五日の時点で「一両日」のうちにさし迫っていたのかも知れない。

以上に七月二八日に至る直前の事情を推察してきたが、ここで(G)五月一六日付草太郎宛某書下<sup>(19)</sup>（案）<sup>(20)</sup>の検討に移ろう。この文書は、その内容からして、春日大宮神主の「在京御代官所」の仰せをうけた春日社祠官の某から、綺莊近辺の

有力者草太郎に命じられたものと考えられる。この文書の年代比定にはやや複雑な手続を要する。

文書は先ず、去る（五月）一二日付の申状を殿下に申し上げた処、御定<sup>ごじよう</sup>があったといい、その内容を記している。

御定云、友清事ハ可被申寺家、於清家者、於社家沙汰可召進也、清家はとのもの、長者仰<sup>ヲ</sup>非可背、不日可沙汰進<sup>ぐく</sup>ム、

文書にはさらに続けて、御定の趣旨として、友清<sup>ともきよ</sup>が神人であつた時に友清の傍輩<sup>ほうはい</sup>が彼に同意し、友清解職の後もお同意しているのはけしからぬことであるという旨が、添え記されている。文書は、以上の殿下御定の内容を、「在京御代官所」の仰せという形で間接的に伝えつつ、最後を「且つは「左京権大夫殿・右中弁殿御奉書等」も分明<sup>ぶんみょう</sup>、厳密であるのだから、早く清家を参洛せしめよ」と結んでいる。

この(G)文書の年代を比定するにあたり、「左京権大夫殿・右中弁殿御奉書」に言及している点は注目してよいが、これは結論的に言つて年代比定の決め手にはならない。<sup>(21)</sup>

この文書で最も留意しなければならぬのは、ここでは友清の解職がもはや明白な既成事実として前提になっている点である。その上で文書は、友清の事は興福寺に申さるべし、として彼の処遇は寺家に仰せられるはずとし、もっぱら清家の召しのことを論じている。社家に命じて清家を召す理由は、友清が解職の後も彼の傍輩が同調行動を継続しているからである（「清家はとのもの、……」とあり、なお彼への期待が示されていることからすると、彼を召すのは、処罰として拘禁する性格のものではなく、傍輩らを説得するよう指示するものであったであろう）。

このような内容の文書は、少なくとも、友清の解職について曖昧さを残しつつ、彼の解職が問題とされていた(E)段



階以前には発され得ぬ性格のものではなからうか。従って私は、(G)は、(A)～(F)の文書の段階からのち一定の事態の進展のあった時期、即ちその日付からして翌寛元二年（以降）に発された文書であると推定する。

以上の検討に基づいて若干の推測を交えつつ事件の推移を復元してみると、以下のようなになるであろう。

・仁治三（一二四二）年（E）にいう「去年」、綺荘において春日社神人友清は同荘の領家方と敵対し、領内に神木を立てる行為に及んだ。

・翌寛元元年七月一日、九条良実辺より興福寺に状して神人清家を一両日のうちに召すべき旨を述べた。(F)

——その後、九条良実辺において友清を解職すべきことを決定か。

・七月一日、九条良実は興福寺に命じて、同寺別会所並びに西金堂寄人と号している前神人友清を召進せようとした。(A)

・七月二日、僧令円は別会五師に状して、友清の事に口入しない旨を申した。(D)

・七月二七日（E）にいう「昨日」、友清はなお召しに応じず、綺荘の名田において刈田狼藉を働いた。

・七月二八日、九条良実は興福寺に命じて、別会所寄人とは別として清家・友清ばかりを召せとした。(B)(C)

・同日、綺荘の領家方の俊村は、京辺に状し、春日社大宮権神主経定を友清扶持の故以って難じ、経定に理非を尋ね問うべきか、或いは友清の解職の速やかならんことを申した。(E)

・翌寛元二年五月一六日、春日社祠官某は、大宮神主「在京御代官所」の意を奉じて綺荘近辺の実力者草太郎に命じ、友清の傍輩の同調行動を止めさせる為に清家を召進せようとした。(G)

## 二 草部清家申状

前章までの、既刊関係史料に基ずく考察によってかなりのことが明らかとなった。しかし、これによっても今一つ判然としない点も残っている（例えば、友清と清家の関係など）。以上の各史料には、相論の一方の当事者である神人側の主張が直接には示されていないが為である。ところが、この相論にかかわる清家申状（未刊<sup>(22)</sup>）が存在するのである。かなり長文であるが、以下に紹介しよう。

去十一日御教書、同十四日到来、謹以令拜見候了、抑任被仰下候之旨、所奉立御神木、可差上之由之事、兼又友清男於自今以後者、可為領家進退之由之御請文<sup>ヲ</sup>可書進之由、同以下知候之處、神人寄人等申云、此条存外事候、所奉立之御神木者、彼坐女寺社<sup>ヲ</sup>放言、并御神木<sup>ヲ</sup>散々<sup>ニ</sup>打擲<sup>大</sup>候依罪科奉立候了、其罪科不被行候<sup>ニ</sup>争無左右可奉上候哉、遂御<sup>(秘)</sup>被<sup>秘</sup>候て之後者、尤以可奉上候、若不然者、全不可奉上候也と令申候、次可進退領家候由可進御請文之由事、此条又以勿論之次第候、其故者、可為進退領家之由不進御請文以前、忽俊村・国近法師之結構として、任自由奉穢御神木候之上、剩神人寄人等之名田<sup>ニ</sup>札立候了、如此既以現不当候<sup>ニ</sup>、可為進退領家之由進御請文候なんと者、神人寄人等一人として不令可安堵候、仍其請文之条勿論事<sup>ニ</sup>て候、全不可書進之由九ヶ郷之神人寄人等令申候て打止候了、此上者沙汰者難治次第候也、雖然狐<sup>(狐)</sup>両条事いかさまにも候へ可致沙汰候之由、<sup>(秘)</sup>司法<sup>ニ</sup>雖加沙汰候、全沙汰者下知不可隨之由令申候、此上者所詮候、友清男一人<sup>ニ</sup>不限候、九ヶ郷神人寄人等一身<sup>(秘)</sup>假給<sup>ニ</sup>之由可申旨一同仕候了、則同意之輩之名田<sup>ニ</sup>被札立候了、其間子細奉付三方、折紙候て雖令申候、一切無承引候、実河内国<sup>(秘)</sup>糧

人之巫女之申状者、一々御成敗候、<sup>(数)</sup>枚輩之神人寄人等申状者、一分も御成敗不候、於今者神人寄人等失面目候了、所詮候、黄衣并各私宅奉祝候御神木者、可進社家候欵、若又大鳥居奉懸候欵、其条者神人寄人等之心候令申候て、一切不随沙汰者下知候、以此旨具可令言上給、清家恐惶謹言、

九月廿一日

草部清家<sup>上</sup> (略押)

進上 千仏御房

右の申状は部分的に文脈の乱れを生じてはいるが、その述べていることは明瞭である。おおよその内容は次のようなものである。

——草部清家が「沙汰者」として、到来した「御教書」に記されてある一つの指示を綺莊近隣の九ヶ郷の神人寄人らに伝えた処、彼らはこの指示に反発した。清家は彼らの間で孤立しつつも、何とか指示に従うように「付法」(強い調子で)働きかけたが、神人らの態度は強硬で、この上は九ヶ郷の神人寄人こぞって自らの身分を返上したいと申し、沙汰者の下知に一切従わないので、以上の現地の様子を言上して欲しい。

「御教書」の指示二点とそれに対する神人らの反論は、まとめると次のようになる。

(指示①) 神人らは自らの立てた神木を撤収せよ。——(反論) 河内国浪人の巫女が「神社<sup>ヲ</sup>放言」し、神木を散々に打擲するという罪科を働いたことに対して神木を立てたのである。その罪科の祓が終えられていないのに神木を撤収することはできない。罪科の祓こそが先決である。

(指示②) 友清はこれからは領家の進退に従うという請文を提出せよ。——(反論) 既に俊村・国近法師のたくらみによって神木が穢された上に、神人寄人らの田に札が立てられているのである。彼らが現にこのような不当行為をなしている所にそのよ

うな請文を提出したならば、この上如何なる事態が生ずることか。神人寄人としては安堵し難いので、この指示は到底受け容れ難い。

また、清家は現地神人らの意向を次のように記している。

——友清に同意した神人寄人の名田に対して領家方によって札を立てられたことを、春日社の社家三方に付して折紙で報告したにもかかわらず、神人の申分は認められず、巫女の申分ばかりが御成敗に預かる結果となり、今となつては神人らは面目を失つたので、神人の身分を返上したい（「一身假給<sup>レ</sup>之<sup>ニ</sup>」、「黄衣并各私宅奉<sup>レ</sup>祝御神木者、可<sup>レ</sup>進社家<sup>ニ</sup>候<sup>ニ</sup>歟、若又大鳥居奉<sup>レ</sup>懸候<sup>ニ</sup>歟」と神人一同主張している。

以上の草部清家申状から分かることを考察してみよう。

事件の発端は、友清と河内国浪人の巫女との間に生じた紛争らしい。神人の側から巫女と称されている者の実像は定かではないが、この者が友清と争いを生じ、その過程で神人を侮辱した（「寺社<sup>ヲ</sup>放言」「御神木<sup>ヲ</sup>散々<sup>ニ</sup>打擲<sup>ス</sup>」）のであろう。これに対し友清は傍輩の神人寄人を募り、かの巫女が何らかの職を有したであろう綺荘内名田に神木を立て、巫女の謝罪（被料物の提出）を要求したと見られる。一方、これに対して綺荘領家の荘官（又は代官）的立場にあったと見られる俊村・国近らは巫女側に立ち、友清や同調の神人らの綺荘内の名田に點定札を立てさせて差押えをはかった。

友清に同調した傍輩は「九ヶ郷神人寄人」と記されている。既にこれに先立って寛喜二（一二三〇）年の春日社神人兼興福寺西金堂寄人紀高綱（多賀兵衛尉）と山城国飯岡荘公文紀藤五との相論に際して、紀高綱に同調した「山城国春日散在神人等」は、田地に神木を立てる、或いは要求が容れられなければ社家三方の所役を勤仕せずと主張し、

本事件とほぼ同一の行動を示していた。<sup>(23)</sup> この事件に注目した丹生谷哲一氏は、その時の神人等言上状の神人連署の部分に記された「円提寺」(現綴喜郡井手町大字井手付近)・「加波多」(現相楽郡山城町大字綺田)・「多賀片」(現綴喜郡井手町大字多賀<sup>たが</sup>)・「市部」(現城陽市大字市<sup>いちのべ</sup>辺)・「山本」(現綴喜郡田辺町大字三山木字山<sup>やまもと</sup>本)の各地名を地図上に確認しつつ、「木津川沿いに居住した」「神人らの一揆的結合」の存在を想定している。<sup>(24)</sup> 清家申状にいう、「九ヶ郷」に、これらの地が含まれていたことはほぼ間違いないだろう。さらに、以上に加えて平尾(現相楽郡山城町大字平尾<sup>ひら</sup>)も春日社神人の居住地であったと確認される。<sup>(25)</sup>

ところで、九ヶ郷の神人らが社家三方に折紙を付したと記されている事は注目に値する。彼らは日常社家三方の「名主」<sup>なぬし</sup>のもとに分属していたが、このような闘争の際には春日社神人として三方分属関係を超えて結集したことを示している。そしてかかる九ヶ郷の神人寄人集団全体の闘争を指揮していたのが、この場合、他ならぬ「沙汰者」草部清家ではなかろうか。彼はこの申状において、神人らを宥めたかのように記してはいるが、結論的に神人らの主張を抑えることはもはや困難と言っているし、客観的に見て、この申状が神人らの主張を代弁する性格のものであることは疑いなかろう。

彼は如何なる意味で「沙汰者」であろうか。社家三方に分属する本社神人のうちに三方ごとに沙汰者(職事<sup>しきじ</sup>)が置かれ、この沙汰者が紛争に際して興福寺・春日社領等に派遣されることもあった(村岡註(3)稿参照)。しかし、草部清家はこのような派遣されてこの地に逗留していた本社神人の沙汰者とは考えられない。そのように考えると、(F)・(B)・(C)・(G)において彼の召しが問題にされていることが理解できないし、次のような史料も存する。<sup>(26)</sup>

市野辺神人沙汰者 能米一石<sup>(合)</sup>長講定、近来沙汰也、  
草太郎清家、

彼が先に検討した「九ヶ郷」の一つの市辺<sup>いちのへ</sup>の住人で、「神人沙汰者」であって「草太郎」と通称されていたことを示すと思われる史料である。<sup>27)</sup>草部清家は現地に活動拠点を有する、九ヶ郷神人の一揆結合のリーダー的存在であったのである。

申状の宛所「千仏御房」とは、(D)における僧令円、或いは(E)における「経定常隨筆師僧」の如き、この地の神人等に近しく、且つ社家への取次をなし得る者として清家に期待された者であろう。

次に、紛争の発端をなした友清の、この申状作成時での立場は、「御教書」の指示②とそれに対する神人らの反論として記されていることの内容から判断すると、おそらく、神人身分を既に解かれたことが現地においてもはや周知のこととなっていた段階のものと考えられる。

私は、以上の草部清家申状の内容からして、その作成時を、(F)と(G)の間、即ち寛元元年九月二一日と推定する。

この推定に立つと、(F)において、その前年（「去年」）、神人らが神木を立てたというのは、清家申状において、神人らが巫女の名田に神木を立てたと自ら認めているのに照応し、同じく(E)において、「昨日」（寛元元年七月二一日）、神人らが名田の刈田狼藉を働いたとあるのは、清家申状中に「神人・寄人等之名田・札立候了」とあることからすると、おそらく神人らがこの領家の點定札を無視する行為に及んだことを指していると考えられる。

さらに、清家申状においては、社家を經由した「御教書」が彼のもとに「到来」していることを記しているのに対し、翌寛元二年五月の(G)においては、草部清家を召すことが「草太郎」に命じられている。神人らの主張に加担するが如きこの清家申状を経た(G)の段階では、社家側は清家の現地における実力を承知しつつも（「清家ほとものもの」）、もはや社家の命を忠実に執行しうる立場に立つ者としては彼を見限ったことを示していると考えられる。(G)の宛所は「草太郎」とあって、沙汰者としての通称のみが記され実名が記されていないことから判断すると、この人物について

社家は未だ熟知していなかったかとも見られるが、ともあれ、清家に代わって現地を社家の願う方向でまとめていくことを期待された者であろう。

こうして草部清家申状を(E)と(G)の間に位置付けることによって、前章で検討したこの事件にかかわる一連の各文書は、以上の如く、より一層必然的な時間の連関の中に確実に位置付けられ、各々の文言は相互に照らし合ってよりその意味あいを明らかにしてくると思われるのである。

### むすびにかえて——黄衣の効力——

以上に寛元元年前後の山城国散在神人に関する一訴訟事件のいきさつを明らかにしえたと考える。最後に、この訴訟において彼らのなした神人身分返上という主張について若干の考察を加え、むすびにかえることとする。

清家申状によれば、神人らは「一身の暇いそぎを給うべし」と主張し、「黄衣や神木を社家に返上するか、若しくは又黄衣を春日社大鳥居に懸けるかは、自分らの心次第」と述べたという。神人らが相論に際して、黄衣や供菜納入の際に用いる桶を大鳥居(一鳥居)に懸けるという行為は、実際にしばしば見られた所である。<sup>(28)</sup>このように、神人の示威行為が、結界の象徴たる鳥居に神人身分の標識たる黄衣や供菜桶を懸けるという形をとったことは、恰も神人らの春日社との距離のとりようを象徴的に示しているように思われ、興味深いことである。さらに、建暦三(一二二三)年六月日付和泉国池田郷春日社神人等解(29)によれば、かの地の神人らは、「若遂無御沙汰者、於一国散在神人者、永不可備供菜、奉返黄衣、忽不企逃散也」と述べている。清家申状の場合と同様の主張である。

総じて神人らのこのような清算主義的主張は、神人らが、自らの頼るべき権門としての春日社の能力に対して顕わ

な失望を示しつつも、なお且つ訴訟における春日社又は興福寺の今後の取り計らいに一縷の期待を込めて脅迫をなしているものと理解される。問題は、果たして彼らが一方的に自らの意志で春日社や興福寺との寄人関係を実際に断ち切るまでに踏み込むことがあったのかという点であろう。

清家申状に、神人らがそれは「自分らの心次第」と述べたとあること、池田郷の神人らが「逃散を企つべし」と述べている点を、文字通りに理解すれば、原理上それはありうることであり許されていたと見なければならぬ。従ってそれが実行に移されるか否かは、あくまで彼らの実生活がたとえ興福寺・春日社との関係を断ち切ったとしても十分成り立ち得たかという時々・個々の事情如何によると、私は考える。

そのような視点から一三世紀の春日社散在神人の動向を検討してみると、彼らは、時に神人として以外の顔をのぞかせている。

①先にふれた、寛喜二（一二三〇）年の春日社神人兼興福寺西金堂寄人紀高綱（多賀兵衛尉）と山城国飯岡荘公文紀藤五との相論に際して、高綱は、相手方から御家人と号して軍兵を率いたと非難されている（但し、高綱自身はこの点について「此等条々極無実也」と反論している<sup>30</sup>）。

②建長七（一二五五）年、和泉国の春日社散在神人らは、「<sup>（くにのじゅうしん）</sup>国重臣」である同国吉見保難掌・下司と相論したが、その際、四郎検校吉次なる春日社神人を、下司に同意の輩として特に非難している<sup>31</sup>。神人らの申状によれば、吉次の家は国衙になく「神人在家」であり、国衙の者でないことは明白で、彼は「重代神人」であるから「寺社政所在<sup>（二）</sup>之」神人交名帳にその名が記録されているはずといい、又「在家<sup>（帳）</sup>」によれば、彼が代々「国前」・「男」の二郷の沙汰人とあることが明鏡であるともいう。そして四郎検校吉次は、春日社神人でありながら、吉見保下司と結んで下司の率いる「数百人之悪党」の一員として傍輩の神人を「打擲刃傷」したというのである。



③正応二(一二八九)年三月日付京都清水坂寂靜院住侶等申状などによれば、摂津国粟生荘の「土民」たる「春日社神人藤若兵衛尉」(十郎兵衛)は、勝尾寺曼荼羅供大阿闍梨として参勤中の尊観上人を山麓の路次において、「率数多軍兵、帶<sup>具</sup>武兵杖」して殺害せんとしたと非難されている。申状によれば、彼は「累代土民」であり且つ「四条町人所<sup>②</sup>従」でありながら(別に「右馬介殿」に召仕われていたともある)、「衛府官」をけがす悪行狼籍を重ねているといい、さらに、にもかかわらず、春日社の大宮新権神主経茂に召仕われてその処罰を免れているのだともいう。

①③に見られる、軍兵を率う、武具を帶す、悪党などの表現は、訴訟に際して相手方の実力行動を非難する際の常套的表現であるから、その実際の行動を想定するに慎重でなければならないが、この期の事情に照らして春日社神人の武装行動は十分にあり得たことと見なければならぬ。

文永四(一二六七)年二月、興福寺・春日社は、春日社神人を殺害して跡を晦ましている摂津国の茂忠法師なる者の「同意之輩」(「茂忠法師来宿同宿輩」)の住宅を悉く焼失せしめんと、奈良の本社神人らを摂津に派遣したが、その際、本社神人は鎧・腹巻の用意を調べて出発している<sup>③</sup>。出発の翌日に興福寺衆徒より、「神木・黄衣によるべし、神人武装は「キクハイ」<sup>(奇怪)</sup>なり」と命じられているので、実際に彼らが鎧・腹巻を着して事に臨んだかは定かではないが、神人らは現地における軍事的衝突の事態を予想し、神木・黄衣のみでは心許無く感じていたのであろう。事実、彼らは二日間に及び垂水牧などで四軒焼却して帰還したものの、現地では阻止する住民との間で衝突が発生しており、この際に一人死亡したという噂もあり、確実には神人の一人が黄衣を引き破られたと報告している。

このように、興福寺・春日社の強い統制下にある奈良の本社神人においてすら、武装の可能性を示しているのである。

総じて一三世紀において、清家申状に見られるような「神木・黄衣が穢された」と春日社散在神人が訴える事件は

頻発しているが、逆にこのことは、在地の現実の場面では、神木・黄衣を楯とする彼らの立場が困難な状況に直面していたことを示していると考えられる。即ち、春日社による神威を背景とした呪的統制への領民の畏れが薄れていくのがこの期の趨勢だったのである。<sup>(34)</sup> 本稿で復元した寛元時一件も例外ではなく、その経過からして神人らの敗北に近い形で推移したものと見られる。そして友清らの散在神人は、神人としての論理の敗北の気配の中で、面を替えて別会所寄人たることを強調したりしながら何とか自身の立場を保持する為の模索を図っていたのである。<sup>(35)</sup>

してみれば、神人自身もが、黄衣の効力という点について訴訟上のロジックとして展開する以上には、それ程の信用を置いていなかったと見ることも可能ではなからうか。前述①②③の事件に見る春日社散在神人、紀高綱(多賀兵衛尉)・四郎檢校吉次・藤若兵衛尉(十郎兵衛)らにとって、春日社神人としての身分は、自身の地位を説明する際の附属的な側面でしかなかったと見られる。

このような状況の中で、春日社への服属からの散在神人の離脱(実質上の神人身分の返上)は、容易に広く進行していたと考えられる。傍輩の春日社神人と敵対した四郎檢校吉次のような人物の登場は決して希な事態ではなかったであろう。

一方、とりあえず春日の神人として踏み止まった者においても同様の事態は進行していた。この時期、興福衆徒・春日社家による紛争地への神人動員命令にもかかわらず、神人らが(本社・散在を問わず)、速かに現地へ下向しない例がしばしば見られる。例えば、本社神人が鎧・腹巻を調べて下向した前述の文永四年の摂津国派遣の際においても、「所詮自国他国御社領<sub>マ、摂津吹田</sub>於募神威之輩者、払底来十八日可到来次田」と命じられたにもかかわらず、実際に現地での制裁行動には参加したのは、本社神人と現地近隣の白人神人のみで、味舌莊<sub>ましたのしょう</sub>ほかの摂津国内興福寺領の者は「一人<sub>モ</sub>不供奉」、「当国ノ散所神人」(大和国散在神人)も「一切不供奉」という状況であった。この事件は直接の利害が本社神

人にかかる事件であったと思われる（或いは、茂忠法師に殺害された神人というのが本社神人であったか）、本社神人のみが摂津下向に積極的であった。後に彼らは、下向に従わなかった散在神人への制裁を要求している程である。<sup>(36)</sup>

この事件において、下向を前にした段階で、下向に参加しそうな散在神人に対し、本社神人らが、「もし参加しなければ、今後自身に生じた紛争に関して、たとえ傍輩の神人らの支持があり、また社家の命があったとしても、本社神人は下向してやらないぞ」と言っている点<sup>(37)</sup>は注目される。このことは、神人の下向というものが、寺家・社家の命に従うという形をとりながらも、実質的には本社・散在の神人集団間の互助的動機に支えられていたことを如実に示しているよう。

この例に見るように、一般に神人らは興福寺・春日社の下向命令に際して、派遣への参加・不参加が後々自身に及ぼす影響や「旅粮」の支給額等を適度に勘案して判断・行動していた。彼らにおいても興福寺や社家の命令は、必ずしも絶対的なものではなくていたのである。

弘長元（一二六二）年の公家新制を受けて興福寺において独自に発せられたと考えられている寺辺新制は、春日社神人について次のように命じている。

近来神人之振舞不可思儀次第也、寺辺國中往反之時者、尤專神人之威儀、深可仰神威之處、用折烏帽子、不着黃衣、好四一半等、於御山取鳥、然間有時者及殺生、有時者致偷盜、此條未曾有之狼藉也、速可禁制也、此等趣可加沙汰事、

博奕を好み獵を行い、時に鬭諍・強奪を厭わぬ、これが神人の実態であった。そしてそのような行為を彼らが働く

において、黄衣・立烏帽子などの神人の装束が人々の畏怖を呼ぶものならば、彼らは決して自ら進んでこれを脱したりはしなかったであろうが、彼らはこれを着してはいない。それらを着することは、かえって人々の侮りを呼ぶことさえあったのではなからうか。

かくして続く南北朝期以降、諸国散在春日社神人は、春日社との実質的繋りを失っていったと思われる。

# 註

(1) 花園大学福智院文書研究会編 (花園大学発行、一九七九年)。

(2) 丹生谷哲一①「和泉国における春日神人」大阪府忠岡町教育委員会編『忠岡の歴史』第三号 (同委員会発行、一九八三年)、

②「春日神人小考」岸俊雄教授退官記念会編『日本政治社会史研究』下 (塙書房、一九八五年)。

(3) 村岡幹生「中世春日社の神人組織」『立命館文学』五二二号 (故三浦圭一先生追悼特集号、一九九一年)。

(4) 永島福太郎編集校訂、全六卷 (吉川弘文館、一九八一〜八六年)。同書に先立ち『春日神社文書』全三巻がある。これは第二巻まで中村直勝編集校訂 (春日神社社務所発行、一九二八年)、第三巻は永島福太郎編集校訂 (同前、一九四二年)。

(5) ここで(C)(F)を含む当該の『福智院家古文書』九九について所見を述べておく。これは題僉に「社家請文」とある成巻文書一巻 (文書一七点所収) である。同書巻末補注には「故福智院庸徳が卷子本に仕立てた」と解説されている。故人の文書伝存への努力は多としなくてはならないが、この記述は不正確と思われる。内閣文庫大乘院文書「唐院古文書写」(全五冊、写真版による)の第一冊中に「社家請文」と題されたものが所収されており、検討するに、文書内容・配列順序ともに一致し、本成巻文書の写であることが判明する。「唐院古文書写」は、その奥書等から判断すると、延宝八 (一六六八) 年以前に「唐院十六巻」と称されて興福寺に既に所在していた成巻文書一六巻分を写したものである。『福智院家古文書』九九「社家請文」もその一つであって、既に江戸時代に現在の形に成巻されていたと見なければならぬのである (近代以降に表紙等の修補がなされた可能性はある)。なお、「唐院十六巻」の成巻に至る事情や現春日大社々蔵文書との関係等、触れるべき点も多いが、本稿の主題から逸脱するので別の機会に譲ることとする。

- (6) 『春日大社文書』六七九。同書頭註において「文書一八参看」とし、寛喜二年の別人の友清のかかわる文書と関係付けているが、適切でない。
- (7) 『公卿補任』・『弁官補任』によるに、彼の右中弁在任期間は仁治三(一二四二)年三月七日〜寛元三(一二四五)年六月二十六日。
- (8) 興福寺衆徒の集会を代表するのが別会五師、それに付属する機関が別会所。稲葉伸道「鎌倉期の興福寺寺僧集団について」『年報中世史研究』第三三号(一九八八年)参照。
- (9) 『春日大社文書』四一三。奉者は「左中弁」<sup>内項</sup>「草名」とあって、同書は「某長者宣」と文書名を付している。某については後述するが、長者宣とも断定し難いので、ここではとりあえず「(某)御教書」と称しておく。なお、同書の頭註に「多武峯神人清家清友の処罰(解職<sup>カ</sup>)」○文書三三四参看」とあるが、適切でない。
- (10) 『福智院家古文書』九九〇。某の名前二字のうち下は「経」と読める。同書はこれを案文としているが、正文と見てよいのではなからうか。なお、同書は翻刻にあたり読点を付していないが、以下本稿において同書からの文書引用にあたっては読点を付すとともに、同書に所収された写真版との対校により文字の読みを改めた箇所については、その文字の左横に傍点を付しておいた。
- (11) 『春日大社文書』五二七。同書は文書名を「僧令円陳状」としている。なお、本文書は『大日本史料』第五編之六、寛喜二年雜載莊園諸職の項に所載。『鎌倉遺文』(四〇〇三)も同年と推定している。
- (12) 『京都府の地名』(日本歴史地名大系26、平凡社、一九八一年)、『角川日本地名大辞典26京都府上巻』(角川書店、一九八二年)は、ともに「<sup>かはのしょう</sup>綺莊」として立項しているが、中世において「綺」一字でカバタと読んだことは、当該項目の説明によつて古代・近世ともにカバタの地名であつて中世には「綺」の一字を宛てていたことが容易に推定されるし、さらにこのことは、そこにも引かれている『大乗院寺社雜事記』文明一七年一〇月一九日條・同二〇日條の兩條を対照することによって一層明白である。
- (13) 新訂増補国史大系『尊卑分脈』第一篇三二六頁参照。「号二条帥入道、…太宰帥、大納言、…嘉祿三七九薨<sup>ハナハタ</sup>」とある。
- (14) 『春日大社文書』五二八。本文書についても、『大日本史料』『鎌倉遺文』(四〇〇五)は前註(11)と同様。
- (15) 前註(3) 村岡論文参照。

- (16) 前註(12) 所掲両地名辞典は、これらの文書を挙げつつ綺荘の領家を興福寺と説明しているが、適切でない。
- (17) 一般に、解職の決定された神人のもとに本社神人が派遣されて、彼から神木を取り上げることが行われていたと考えられる。「中臣祐賢記」(永島福太郎編集校訂『春日社記録』所収、以下同) 文永四年正月二一日條に、「近津内右衛門、号当社神人、速可解職之由被仰下之、(中略) 神人廿人可差下也ト有之、」<sup>(衆徒より)</sup>「<sup>(神人)</sup>両三人ナリトモ差下シテ可上神木之由猶被仰出也」とある。
- (18) 『福智院家古文書』九九〇。同書は、本文書も案文としているが正文とみてよいのではなからうか。
- (19) 『春日大社文書』(第六卷) 大東家文書七六。同書並びに『春日神社文書』第三卷大東家文書七三(何れも永島氏編集校訂)は文書名を「某書状」としている。一方、『春日神社文書』第二卷「付録」大東家文書一七(中村氏編集校訂)においては「行□奉下知状案」としている。私も案文かと思う。
- (20) 『春日大社文書』は某を「行齊<sup>(マ)</sup>」と読んでいる。春日社祠官として行齊という名乗りはやや奇異に感じられ、本文書が案文とすれば、「齊」はもと「春」ではなかったか。
- (21) (C)(F)の如き書状を当時奉書と表現したとは、有り得ることである。しかし、「左京権大夫」が文字通りとせば、その奉書とは、明らかに(C)右京権大夫書状とは別物でなくてはならないし、そもそも、この事件にかかわって九条良実の近辺から(C)や(F)の如き形式の文書が幾度となく発された可能性は高いのであるから、ここに引用された二つの「御奉書」が直ちに適々現存している(C)や(F)を指すと考えるのは適切でない。
- (22) 「福智院文書」(名古屋大学国史学研究室架蔵写真版による)。
- (23) 『福智院家古文書』一六八山城国春日散在神人等言上状など。
- (24) 前註(2) 丹生谷②論文二六七頁。なお、前註(12) 所掲平凡社地名辞典「円堤寺」の項ほか両地名辞典の各関係項目参照。また、黒田日出男『日本中世開発史の研究』(校倉書房、一九八四年) 第四章「中世的河川交通の展開と神人・寄人」(論文としての初出は一九八〇年)は、木津川の源流域である宇陀川・名張川水系における春日神社の遺存状況を手がかりにこの一帯における春日社神人の活動を復元しており、渡邊浩史「流通路支配と悪党」『年報中世史研究』第一六号(一九九一年)は、以上の中間に位置する山城国相楽郡加茂荘の悪党と興福寺・春日社とのかわりを想定している。
- (25) 内閣文庫大乘院文書「興福寺年中行事」(写真版による。奥書により正応五(一二九二)年以前成立と判明)の一二月二日條「別会所例進物事」の項に、「山城国神人寄人 油一斗二升…」、「古河神人寄人等薪十二駄<sup>(胎祭、駄、(輪)駄、平尾九駄、三川、駄)</sup>」など

とある。「胎禁」「三川」については未詳だが、「古河」とは現綺田・平尾付近をさした(前註(12)所掲各地名辞典「古河莊ふるかわのしょう」の項参照)。この地域の春日社神人が別会所寄人としても暮の進物を納めるのを例としていたことが分かる史料である。従ってここにいう「神人寄人」も、また草部清家申状中に頻りに使用される「神人寄人」の語も、「神人と寄人」の意味ではなく、「神人兼寄人」の意と理解すべきであると考えられる。さきに検討した通り、(C)文書ではことさらに別会所寄人と春日社神人とは截然と分ける論理を押し出しているが、この地域の実態としては兼帯であったことも判明する。

(26) 前註(25)史料同項。

(27) 寛元時より右史料成立時期の推定下限時(正応五年)まで約五〇年間の開きがあるが、ここにいう「草太郎清家」が「草部清家」と同一人物である可能性は極めて高いと言わなければならない。とすると草部清家の拠点は市辺いちのべに存し、また「草太郎」とはこの地の神人沙汰者の代々の通称であったと推定される。

(28) 前註(2)丹生谷①論文九六～七頁。

(29) 『福智院家古文書』一八。

(30) 『福智院家古文書』九九(春日社神人左兵衛尉紀高綱陳状案)。

(31) 本事件については、『福智院家古文書』三三春日社神人等申状による。

(32) 『箕面市史』史料編第一(一九七二年)所収「勝尾寺文書」三二九、同三二八勝尾寺衆徒等申状案、同三三〇勝尾寺住侶等重申状案、『鎌倉遺文』一六九四三～五。

(33) 「中臣祐賢記」文永四年二月一五日、二二日、二三日、二六日條。

(34) 「中臣祐賢記」弘安三年九月一〇日條によれば、春日社祠官の一人が神木を田に立て置いたところ、作人は、「柳ノ枝ヤナギ四手ヤ懸天立之」てたようなものは神木ではないといって「件柳枝片方へ取退」けている。議論がヤナギであったかサカキであったかという点に矮小化されているが、作人らは、祠官が神木として立て置いたことを承知しながらこの行為に及んでいるのである。

(35) 前註(2)丹生谷①論文一〇七頁は、前註(29)和泉国池田郷春日社神人等解が、「於社家御沙汰者、有若亡之次第也、於今者、衆徒御沙汰シテ」と述べている点に注目している。寛元時の一件とも共通する神人らの動向がうかがえる。

(36) 「中臣祐賢記」文永四年三月一日條、同一九日記事。

(37) 「中臣祐賢記」文永四年二月一五日條。

(38) 『福智院家古文書』九九(一)春日社執行正預能繼・大宮神主成繼連署請文、同(二)春日若宮神主祐賢請文に所引。稻葉伸道「公家新制と寺辺新制——興福寺寺辺新制を中心に——」『名古屋大学文学部研究論集』史学三二（一九八六年）参照。